

3 発掘調査の実施

の だ うち 野 田 内 遺 跡

所 在 地 豊田市下山田代町野田内地内

(北緯 35 度 1 分 46 秒

東経 137 度 18 分 55 秒)

調 査 理 由 豊田・岡崎地区研究開発施設
用地造成事業

調 査 期 間 平成 24 年 6 月

調 査 面 積 350 m²

担 当 者 鵜飼雅弘・伊奈和彦・奥野絵美

調査の経過 豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成に伴う事前調査として、愛知県企業庁より委託を受け実施した。

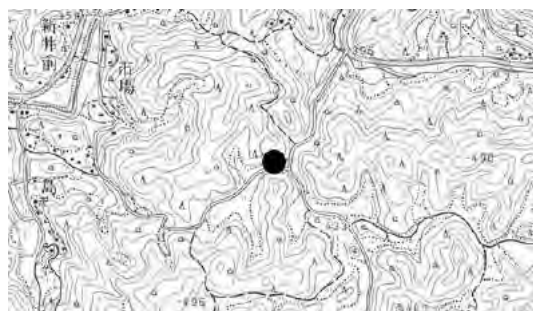
立地と環境 野田内遺跡は沖川に面した平坦地から斜面地上に立地している。周辺の遺跡としては、谷を挟んだ東側の尾根に和倉遺跡、南側の谷部に柿根田遺跡が位置している。

調査の概要 調査地点は、現在は植林地として利用されている平坦地部分であり、調査面積は 350 m²をはかる。調査の結果、古代～近世の遺構・遺物を検出した。調査では標高 425m 前後の上層面で遺構検出を行ったのち深掘りを行い、下層面の状況確認を行った。

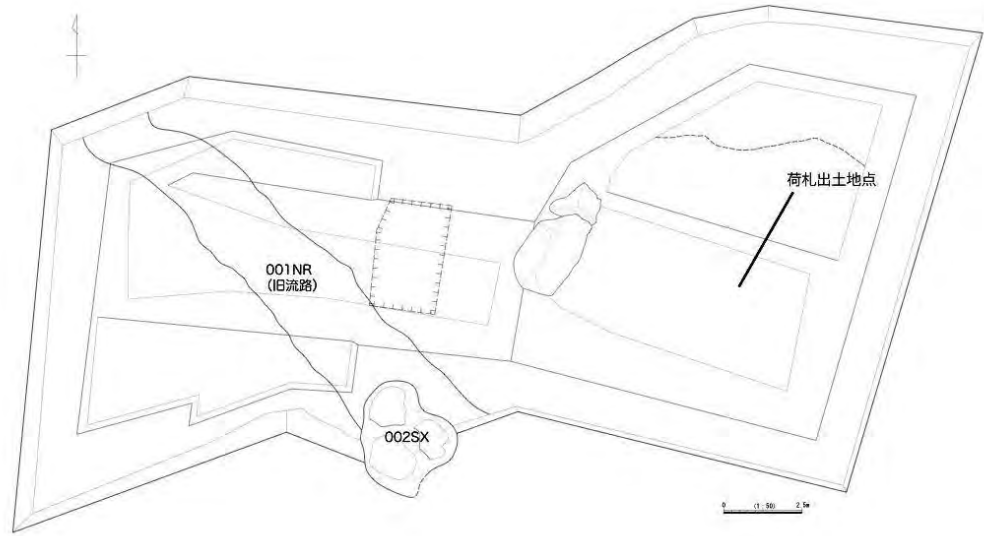
上層面 旧耕作土を除去したのち、遺構検出を行ったところ、調査区を北西方向から南方向に横断する流路跡(001NR)を検出した。流路は幅約 2.5m、深さ約 0.5m の形を取る。流路の中央部では木製の杭列が見つかっており、護岸施設と考えられる。杭の AMS 炭素 14 年代測定を行ったところ、暦年代範囲は 17 世紀後半～20 世紀前半を示し、江戸時代以降の値となった。遺物の出土数は少ないが、寛永通宝や近世の陶磁器を中心とした遺物が出土している。

下層面 下層面では、厚さ 50cm 前後の黒色粘土層が風化花崗岩の岩盤上に堆積しているのが確認できた。黒色粘土層は植物質を多量に含む沢の自然堆積層であり、層中からは灰釉陶器や山茶碗、荷札と思われる木製品が出土している。黒色粘土層から採取した生材の針葉樹の AMS 炭素 14 年代測定を行ったところ、13 世紀代の暦年代範囲を示し、おおよそ鎌倉時代の年代値となった。(奥野絵美)

まとめ 本遺跡では、複数の流路を検出した。上層で検出した近世以降の流路は杭や石で護岸がされていることが分かった。下層面で検出された流路からは鎌倉時代のものと考えられる遺物が出土しており、上流部に生活の場があったか、あるいは、この流路が荷を運搬するために使われていた可能性も考えられる。今後、出土遺物等からの検討が必要である。(伊奈和彦)



調査地点 (国土地理院 1/2.5 万地形図「東大沼」)



野田内遺跡平面図



近世以降の自然流路 (001NR) 検出状況



下層面確認状況



荷札様木製品出土状況 (下層面)



木製品出土状況 (下層面)

じん でん ひよも 神デン・日面遺跡

所在地

豊田市下山田代町神デン、
日面地内

(北緯 35 度 1 分 36 秒
東経 137 度 18 分 28 秒)

調査理由

豊田・岡崎地区内研究開発施設
用地造成事業

調査期間

平成 24 年 6 月～ 8 月

調査面積

1,500 m²

担当者

鵜飼雅弘・小澤健次郎・鈴木恵介

調査の経過

調査は、豊田・岡崎地区研究開発施設用地造成に伴う事前調査として、愛知県企業庁より委託を受けて実施した。

立地と環境

神デン・日面遺跡は、豊田市下山田代町神デン・日面、下山地区の中心である大沼地区の南西方向約 2km に位置する。流域には属するものの郡界川からは直線距離で約 400m 離れている。

平成 24 年度調査区は西に開口する谷の奥に立地する。谷の傾斜は西に向かってゆるやかに下り、現況では当調査区が谷の中で最も奥の水田となる。谷は居住部分を除いて水田となっており、多くは圃場整備が行われている。谷の入り口付近には真宗大谷派の寺院、長照寺があり、その周辺が集落の中心を成す。調査区の現況は東から西に下る 3 枚の水田であり、標高が低い西側の水田ほど面積が大きくなる。水田の南限に沿う形で農道が通っている。周囲は植林された杉林である。周辺斜面からの湧水が豊富で、長照寺より東側の水田はこの湧水を用いている。

明治期の地籍図によると、かつては周囲の斜面に屋敷地が存在していた。現在は建物や基礎も確認することはできず、試掘調査・範囲確認調査によれば中世～近代までの遺物が確認されている。

調査の概要

調査は、現況の水田の形態を保った状態で畔を残し内側を主に掘削した。これは発掘調査によって発生する濁水を調査区内にとどめ、沈砂池に排水する経路をとったためである。

層位は上から現在の耕作土、床土、過去の耕作土、地山となっている。遺物の有無を確認しつつ床土までを重機によって除去し過去の耕作土の上面で遺構検出を行った。検出完了後は、包含する遺物に注意しつつ過去の耕作土を除去した。

遺構検出面とした耕作土上面では、ピット 19 基、土坑 1 基、微細な耕地段差を検出した。耕地段差間の耕地はいずれも現在の水田に比べると極めて狭小であり、判明する面積は約 5 m²～13 m²である。これらの耕地段差は明瞭な畦畔を検出できず、そのため耕地跡は水田とは断定できない。プラントオパール[®]の分析も行ったが、栽培作物は検出されなかった。耕地跡の年代は、後述の出土遺物から近世初頭までに形成されたと考えられる。各調査区の断面で確認で



調査地点 (国土地理院 1/2.5 万地形図「東大沼」)

きたが、過去の耕地跡は、数回にわたって土を盛り上げられた痕跡が見え、盛り上げた際には、いずれも耕地単体の面積が増加するように拡張されている。今回の調査では、最も下層で確認できた耕地跡の検出を行った。柱穴は径 0.2m～0.3m の規模であるが、整った列を成すことはなく、単体もしくは数基で用いられた可能性が高い。埋土は現代の耕作土や床土に近い色調・土質を示すことから、近代以降の稲木（イナキ・別名ハサカケ）の可能性もある。

他には石組みの溝（009SD・014SD）が検出された。層位からは先述の耕地跡と同時期に属すとみられる。

009SD は石が 1～3 段分残存し、検出部分の東端では約 90 度屈曲する形状をしている。屈曲部は改修を受け、石の積みなおしや溝の再掘削（浚渫）が行われており、一定期間利用されていたと考えられる。

009SD の南岸西端部分では径 0.1m 未満の円礫が敷設されている様子が観察できた。ただし調査区端のため拡張等が行えず詳細は不明である。同じ 009SD の他の部分ではこのような礫の敷設は見られない。

014SD については、石が 1～3 段に積まれているのは同様だが、石列が 1 列検出されたのみであった。調査区南壁を探索しても石に当たらないことから、1 列のみで耕地跡や畦畔で護岸のように設置した可能性も考えられよう。ただし C 区の南西端部に位置するため、溝の幅が広い場合は対岸部分が現農道下に存在する可能性は残る。

中世の遺物

C 区で検出された長辺約 2m の巨礫は上辺部分に多数の矢穴を残す。元はさらに大きな岩であったものを割って搬出したものと見られる。同様の矢穴が見られる石材は、日面遺跡内の石垣中にも多く見られる。遺物は、耕地跡を形成する層からの出土が最も多く、そのうちの多くは中世陶器（山茶碗）である。耕地跡に含まれる遺物の上限は灰釉陶器、下限は大窯製品となる。このことから今回の調査で確認できた最初期の耕地が造成された年代は中世末～近世初頭ごろと考えられ、以降は谷の幅を拡げて耕地を拡張したものと思われる。

まとめ

今回の調査では、中世後期～近世初頭に造成された耕地跡や同時期と考えられる石組溝が検出された。現在は植林を受けて風景は大きく変化しているように見えるが、植林の下に残る水田跡も、古ければ中世後期～近世初頭まで遡る可能性がある。一方で灰釉陶器や山茶碗などの陶器類はこれらの耕地跡よりも古い年代を示し、これに対応する遺構の検出が今後の課題となろう。

（鈴木恵介）

※ 埋文センター 鬼頭氏のご教示をいただいた。



調査区配置図 (S=1:500)



A区 全景（南西から：奥の黒い土色が耕地跡）



A区 耕地跡（南から：耕地段差付近に柱穴分布）



B区 全景（南西から：人のいる場所が耕地跡）



B区 柱穴（上層の水田床土と同様の土で埋没）



B区 009SD（写真中央付近が屈曲部）



C区 全景（西から：右端に 014SD）



C区 巨礫の矢穴（矢穴の大きさは幅 3~4cm）



C区 014SD（石列が一行のみ）